安心できる自動車保険どこにある？

「最近の保険は分からない」なんて声をよく耳にするようになった。確かに、近ごろの保険商品は、そこまでやるかの特約やサービスに加え、料金体系もやたらと細かく複雑だ。しかし、さまざまな特徴を持つ商品がそろっているということは、裏を返せば、われわれ消費者にとってはまたとないチャンス。自分のライフスタイルに合った保険が選べる時代ともいえるのだ。本当に安心できる保険は何か。まずは身近な自動車保険から総点検してみよう。

失敗しない保険選び

保険情報サイト「イーエフピー」花田敬社長

「これだけ保険商品が複雑になると、販売員でさえその商品のすべてを分かっている人は少ないのでは」と話すのはネット上で保険情報を提供するサイト「e－hoken.com」を開設するイーエフピー㈱社長の花田敬氏（41）。

花田氏は保険戦国時代をにらみ「公正中立な立場の保険カウンセラーが必要」との思いからサイトを立ちあげたという。

ところで、ダイレクト保険というと安さばかりが目につき、人的なサービスなどに不安も残る。同サイトでは、保険相談をはじめ、アンケート調査なども積極的に行っている。

「確かにダイレクト保険というと、どうしても保険会社と電話などでのつながりになるので、サービス内容に不安を感じている方も多いようですが、ウチのサイトで行っているアンケートでは、ダイレクト系の保険会社が上位になっています。人的なサービス面も含めて、国内大手損保会社と遜色はない、とみていいでしょう」

そんな花田氏が失敗しない自動車保険を選ぶコツとして「自分を知ること」とアドバイスする。

「事故歴や、免許はゴールドなのか否かはもとより、自分がどういう時に車に乗るのか、どういう保障が欲しいのか。つまり自分の状況を把握することが何よりも大切。自分のカルテを正しく持つことです。そして、次に各社の保険料の見積もりを取る。日本は長い間、保険料が同一料金でしたから、見積もりを取る、という行為に慣れていない人も多いかもしれませんが例えば、引越しを業者に頼むにしても見積もりを取るでしょ？　それと一緒です」

積極的に自分に合った保険を選ぶことが賢いドライバーへの第一歩だ。

「消費者の保険への関心は年々高まっている」と花田社長。「e－hoken.com」では主要14社の見積もりを無料サービスしている。アドレスはhttp://www.e－hoken.com

事故急増＝保険戦国時代

さて、自動車保険はいうまでもなく任意保険である。加入するかしないかは本人の自由。だが別表のように、交通事故の件数は近年急増しており、さらに万一、相手が死亡または、重度の後遺障害になった場合、賠償金が2億円以上となるケースも少なくない。

賠償金2億円超えるケースも

やはり備えは必要だろう。それでは、どんな保険に入るのがベストなのか。

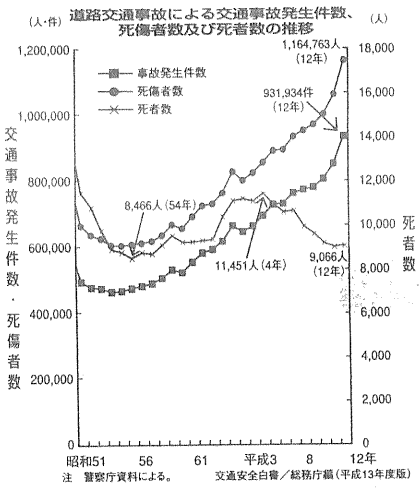
自動車保険市場は今、その販売方法によって2つに大別される。ひとつは国内の損保会社が代理店を使って保険商品を販売する在来タイプ。もうひとつは代理店を持たず、電話などによる通信販売を中心とするわゆるダイレクト保険と呼ばれるもの。

以前は自動車保険といえば、ディーラーや代理店を通して契約するものと決まっていたが、97年の保険制度の自由化に伴い、外資系を中心とするダイレクト型が参入。その後、国内損保会社もダイレクト系自動車保険を取り扱うようになり、市場を揺るがす存在になっている。

それまでの自動車保険は、新車購入時にディーラーに勧められるまま加入したり、代理店員との付き合いから加入したりするケースがほとんど。もっとも、自由化以前は同一条件においてはどの保険会社も基本的に保険料は一定という『縛り』があったので、〝なれ合い〟加入もやむをえなかった。

ところがダイレクト保険の登場により、保険料の価格競争はいや応無しに火がついた格好だ。前述の通り、ダイレクト保険は代理店を通さず、消費者が電話・インターネットなどを使って保険会社と直接やりとりする。そのため代理店の中間マージンが省け、その分を保険料に還元できる。

通常2、3割は安くなるといわれている。



ライフスタイルに合った商品へ

見直しのチャンス！

さらにダイレクト保険最大の武器である『割安感』はリスク細分型により一層、享受できるシステムになっている。

リスク細分型とは、運転に伴うリスク（危険性）を設定したもので、これも保険の自由化に伴い商品に取り入れられるようになった考え。運転者の年齢、性別、運転歴など細かく分類し、その運転者のリスクの高さにより保険料が設定されている。初心者よりは、ベテランが、若い人よりは年齢の高い人の方が一般的に事故は起こしにくい。つまり事故を起こしやすい人と起こしにくい人で、保険料に明確な差をつけられるようになったのである。

もっとも、リスク別に保険料に大きな格差があるということは当然、事故歴のある人などはかえって保険料が割高になるケースもある。

いずれにせよ自分がドライバーとしてどの程度のリスクを持っているのか。それを自身でしっかり把握さえすれば、より割安な保険料で、同じ保障内容、もしくはそれ以上の手厚い保障を受けることも可能なのだ。

保険制度の自由化から3年、保険各社の商品開発ラッシュもひと段落した。市場はようやく円熟期を迎えようとしている。今こそ、自動車保険を見直す時期が来ているといえるだろう。

どういう保障がほしいのか、自分のカルテを正しく…

<交通事故賠償に関する主な高額判決例>

認定総損害額	被害者	判決（年）
2億9736万円	会社役員・男性（40）、後遺障害	東京地裁（1995）
2億6562万円	大学浪人・男性（19）、後遺障害	大阪地裁（1998）
2億6548万円	大学生・男性（20）、後遺障害	東京地裁（1998）
2億4359万円	高校生・男性（16）、後遺障害	大阪地裁（2000）
2億2162万円	医師・男性（39）、死亡	釧路地裁（1986）
2億0359万円	小学生・女子（6）、後遺障害	横浜地裁（2000）
2億0049万円	配管業・男性（32）、死亡	名古屋地裁（1996）

「日本の損害保険　ファクトブック2001」／（社）日本損害保険協会
注1）認定総損害額とは被害者の損害額（弁護士費用を含む）をいい、被害者の過失相殺相当額あるいは自賠責保険等で支払われた金額を控除する前の金額。
注2）認定総損害額は、千円以下切り捨て。

☆